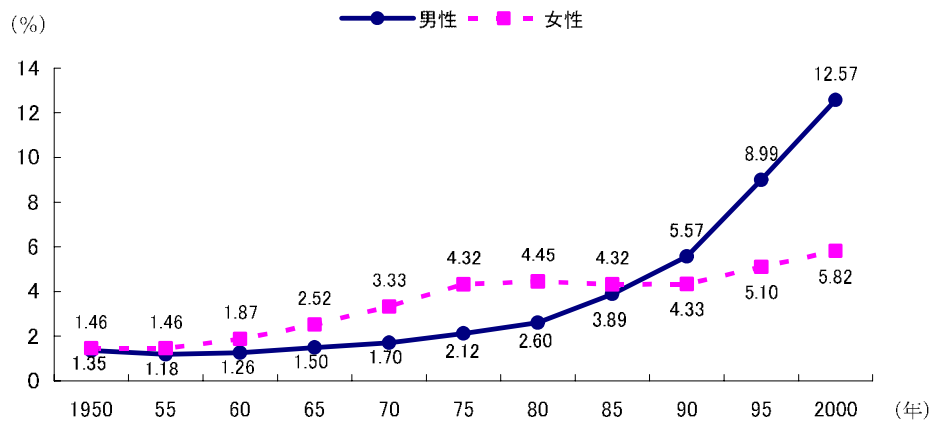


# 情緒的サポート源としてのきょうだいと家族\*

吉原 千賀

## 1 はじめに

『平成17年版国民生活白書』は、「子育て世代の意識と生活」と題して結婚行動や意識の変化を指摘する。具体的には生涯未婚率の急速な高まり（図1）や、継続的な関係を前提とする法律婚を重視する意識がまだ高い一方でその関係を解消すること、すなわち離婚に対する抵抗感が特に女性の間で薄れはじめてきていることなどである（内閣府 2005b）。



- (注) 1. 『平成17年版 国民生活白書』 表1-1-10図をもとに作成。  
2. 生涯未婚率は、総務省「国勢調査」により算出。SMAM (Singulate mean age at marriage) は、  
静態統計の年齢別未婚率から計算する結婚年齢であり、次式により計算する。  
 $SMAM = (\sum Cx \cdot 50 \cdot S) / (1 \cdot S)$  ただし、Cxは年齢別未婚率、Sは生涯未婚率である。の平均値であり、  
生涯未婚率は、45～49歳と50～54歳未婚率50歳時の未婚率を示している。

図1 男女別生涯未婚率の推移

一方、65歳以上の高齢者においても、2000（平成12）年における有配偶率は、男性83.1%に対し、女性は45.5%と女性高齢者の2人に1人が配偶者なしとなっていることや未婚率が男性1.7%、女性3.3%、離別率は男性2.2%、女性3.5%と共に上昇傾向となっていることが指摘されている。また、配偶者の有無にかかわらず、「子ども夫婦と同居」は2003（平成15）年には女性で30.6%、男性で21.0%と1987（昭和62）年の割合に比較して半減近くの減少となっている（内閣府 2005a）。

このような生涯未婚率の上昇や離婚の増加、子どもとの同居率の低下は、今後きょうだいからのサポートを頼りにする必要性を増加させ、きょうだい関係はより重要性を持つよ

\* 初出：吉原千賀，2006，『奈良女子大学社会学論集』，13,195-208

うになるかもしれない (Cicirelli 1996). そこで本稿では、情緒的サポート源としてのきょうだいに焦点を当て、それを頼りにするか否かに配偶者や子どもといった家族がどのような影響を及ぼすのかについて追究することを目的とする。

## 2 先行研究での知見

成人期以降のきょうだい関係を中心にすえた日本の研究はいまだ緒についたばかりであり、日本よりも研究が進む欧米でも多くはソーシャルサポートにかんする研究のなかで検討されてきた。そこではサポートを求める相手として配偶者や子どもなどと共にきょうだいが置かれ、関係どうしを比較検討することに関心が寄せられている。その背後仮説の一つが、「ハイラーキー・代償 (The hierarchical-compensatory) 仮説」(Cantor 1979) である。この仮説は、例えば未亡人で配偶者がいないなどのようにある関係がなかったり、子どもがいても離れて暮らしているために関係自体はあってもサポートが得られにくい場合に、それを補うために他の関係が求められるとするものである。その際、第一義的な関係性 (例えば配偶者や子ども) の代わりにそれに続く第二義的な関係性 (例えばきょうだい) がクローズアップされるという。

この仮説に従えば、配偶者、子どもといったサポート源が低下、消失するとサポート源としてのきょうだいがソーシャルサポートネットワークにおいてより重要な位置を占めるようになっていたり、そもそもそれらのサポート源を持たない未婚者や子どものいない人 (例えば White & Riedmann 1992 ; Johnson & Catalano 1981) では、きょうだいがライフコースを通じてサポートネットワークの重要な位置を占め続けるかもしれない。すなわち、他の人間関係状況を含めたネットワークのなかできょうだい関係を捉えなおす必要性を示唆する。あるいは一口にきょうだいと言っても、女きょうだいがいることがとりわけ女性たちにとって (例えば Gold 1987) きょうだいとの接触やサポートを増加させる (例えば White & Riedman 1992) こともあれば、きょうだい数 (生存中) が多いほど交流頻度が高くなる (安達 1999;2001) というように生存しているきょうだい数自体が影響を持つことも考えられる。

成人期以降になると一般に両親、配偶者、子どもが第一義的な関係性になってくる一方できょうだいは第二義的な関係性になるという (Antonucci & Akiyama 1987). しかしながら常にそうだとはいえず、必要に応じて現れる潜在的なサポート源となっているかもしれない (White & Riedmann 1992). 例えば地理的距離が離れていたり接触頻度が減っても加齢に伴って親密さやきょうだいとの絆のもつ意義が増すこともある (Gold 1987; Campbell et.al. 1999). また、学歴や収入といった社会経済的要因がライフステージ要因とともにパーソナル・ネットワークの広域化を左右する機会・制約要因となるとの指摘もある (松本 1995). Connidis,(1992)は、結婚や子どもを持つこと、離婚したり未亡人になることはきょう

うだい関係を変化させるため、家族全体のユニットの中できょうだい関係を捉えることの重要性を強調する。そして、そうすることは生涯を通じての人生移行がきょうだい関係に及ぼす影響を理解するうえで重要なコンテクストを与えると主張する。

以上の先行研究での知見をふまえ、本稿では成人期以降の家族全体のユニットのなかでサポート源としてのきょうだいを捉える。そして、「年齢」「性別」「学歴」「収入」「婚姻状況」「子どもの数」「女きょうだいの有無」「生きょうだい数」「地理的距離」「接触頻度」の計 10 要因との関連を追究する。

### 3 使用するデータと対象者の属性

本稿での分析に使用するデータは、2004 年 1 月～2 月にかけて日本国内に居住する 1926～1975 年生まれ（2003 年 12 月 31 日現在で 28～77 歳）の男女を対象に日本家族社会学会が行った「第 2 回家族についての全国調査(NFRJ03)」(以下、NFRJ03 と略記)で得られたものである<sup>1)</sup>。NFRJ03 は基本的に「第 1 回家族についての全国調査 (NFRJ98)」(以下、NFRJ98 と略記)の継続調査として位置づけられているものである。「きょうだい関係項目の多さはNFRJ98 の特徴のひとつであり、NFRJ98 データはきょうだい関係を新たな研究領域として研究の俎上に載せたといえ」(渡辺・稲葉・嶋崎 2004:416)、「新しい研究領域の(再)確立として注目」(石原 2001:15)されている。先述のとおり、日本における成人期以降を対象にしたきょうだい研究はいまだ緒についたばかりである現状にあって、それを全国代表サンプルで追究することを可能にした画期的なデータといえる。

先行研究での知見を踏まえ、分析で使用する説明変数は「性別」、「年齢」、「学歴」、「世帯収入」、「婚姻状況」、「子どもの数」、「女きょうだいの有無」<sup>2)</sup>、「健在のきょうだい数」、そして、1 番目のきょうだい<sup>3)</sup>との「地理的距離」、「接触頻度」<sup>4)</sup>、被説明変数は、「情緒的サポート源としてきょうだいを頼りにするか否か」<sup>5)</sup>である。

本稿では全対象者 6302 人(男性 2966 人、女性 3336 人)のうち、「きょうだいがいる(いた)」5854 人(男性 2756 人、女性 3098 人)を対象に分析を進める。対象者の主な属性は次のとおりである。全対象者 5854 人のうち、男性が 47.1%、女性が 52.9%とやや女性が多い。年齢は 28 歳～77 歳で平均 51.62 歳である。学歴は初等教育が 60.9%、中等教育が 21.2%、高等教育が 17.9%と初等教育の比率が高く、世帯収入については「収入はない」から「1600 万円以上」で最頻カテゴリーは「500～599 万円台」である。婚姻状況は、「現在配偶者がいる」人が 81.7%、「いない(死別した)」人が 5.5%、「いない(離別した)」人が 4.3%、「いない(結婚したことがない)」人が 8.4%であり、前述の現代社会状況を反映するように本調査データの若年コーホートにおいても離婚率が高いことが指摘されている(日本家族社会学会全国家族調査委員会 2005:53)。子どもの数は、「2 人」という人が 46.7%と最も多く、「3 人」が 19.2%、「1 人」が 15.6%、「いない」が 15.1%と続く。

きょうだいについて、女きょうだいのいる人は72.0%、いない人は28.0%で、健在のきょうだい数は、「1人」が最も多く33.5%、以下「2人」が28.9%、「3人」が16.6%である。きょうだいとの「地理的距離」は、「片道1時間未満」の割合が最も高く38.9%、それに「片道3時間以上」が27.6%、「片道3時間未満」が20.6%である。「接触頻度」については、「年に数回」が48.6%と半数近くを占め、「月1～2回」が25.0%と続いている。

#### 4 分析結果

まず、本稿での分析において取り上げる諸要因のカテゴリごとに情緒的サポート源としてきょうだいを選択するか否かの割合、および各要因と選択するか否かの二変数関連分析結果を示そう（表1）。

表1 使用変数ときょうだいの選択割合

変数名	カテゴリー	(%)		Cramer's V
		選択	非選択	
性別	男性(n=2736)	20.9	79.1	0.130***
	女性(n=3088)	32.5	67.5	
年齢層	若年〔1975～1960年；28～47歳〕(n=2308)	25.0	75.0	0.058***
	中年〔1941～1955年；48～62歳〕(n=2063)	30.5	69.5	
	高齢〔1926～1940年；63～77歳〕(n=1453)	25.4	74.6	
学歴	初等教育(n=3515)	27.9	72.1	0.064***
	中等教育(n=1224)	29.8	70.2	
	高等教育(n=1037)	21.3	78.7	
世帯年収	399万円未満(n=1641)	28.0	72.0	0.022
	400～699万円(n=1818)	27.1	72.9	
	700～999万円(n=1055)	27.7	72.3	
	1000万円以上(n=1310)	25.3	74.7	
婚姻状況	配偶者あり(n=4758)	25.3	74.7	0.082***
	離死別(n=574)	35.4	64.6	
	結婚したことがない(n=490)	33.9	66.1	
子どもの数	いない(n=872)	31.7	68.3	0.046**
	1人いる(n=898)	27.7	72.3	
	2人以上いる(n=4054)	25.9	74.1	
女きょうだいの有無	いない(n=1631)	14.1	85.9	0.182***
	いる(n=4193)	32.1	67.9	
健在きょうだい数	1人いる(n=1919)	21.2	78.8	0.102***
	2人以上いる(n=3789)	30.8	69.2	
地理的距離	片道1時間未満(n=2902)	29.4	70.6	0.054***
	片道3時間未満(n=1161)	28.9	71.1	
	片道3時間以上(n=1545)	23.9	76.1	
接触頻度	年数回以下(n=3249)	20.3	79.7	0.194***
	月に1～2回以上(n=2391)	37.9	62.1	

(注) 欠損値を含むため、各変数でnの合計が異なる。

先行研究での指摘どおり、男性(20.9%)よりも女性(32.5%)で、世帯年収についてもほぼ年収が低いほど、子どもの数が少ないほど、女きょうだいがいない人(14.1%)よりもいる人(32.1%)ほど、健在きょうだい数が多いほど、地理的距離が近いほど、接触頻度が高いほど、情緒的サポート源としてきょうだいを選択する割合が高い。年齢層に目を移すと

中年層で 30.5%と最も選択割合が高く、若年・高齢層ではそれぞれ 25.0%、25.4%とほぼ同じ割合である。学歴は、中等教育が最も選択割合が高く 29.8%、それに初等教育が 27.9%、高等教育が 21.3%と続いている。年齢と学歴については、先行研究での知見とは異なり年齢や学歴が高い方が、あるいは低い方がきょうだいを情緒的サポート源として選択するというわけではない。また、二変数関連分析の結果、世帯年収を除く全ての変数との間に有意な関連が見られた。

しかし、これらの相関関係には擬似相関、あるいは擬似無相関が存在することも考えられる。そのため、他の要因の影響を統制した各要因の個別の影響を探る多変量解析を行う必要がある。本稿では、「情緒的サポート源としてきょうだいを選択するか否か」を被説明変数にし、先で検討した諸要因全てを説明変数として投入した<sup>6)</sup>二項ロジスティック回帰分析を行った。その対象者全体での結果を示したのが、表 2 である。

表 2 二項ロジスティック回帰分析結果 (全体)

変数	B	Wald	オッズ比
性別〔男性〕			
女性	0.470	47.504	1.599***
年齢層〔若年〕			
中年	0.293	13.481	1.341***
高齢	0.016	0.030	1.016
学歴〔初等教育〕			
中等教育	0.109	1.783	1.116
高等教育	-0.038	0.153	0.963
世帯年収〔399万円未満〕			
400～699万円	0.107	1.614	1.113
700～999万円	0.181	3.376	1.199
1000万円以上	-0.051	0.298	0.950
婚姻状況〔配偶者あり〕			
離死別	0.408	14.861	1.504***
結婚したことがない	0.449	9.589	1.566**
子どもの数〔2人以上いる〕			
いない	0.198	2.887	1.219
1人いる	0.151	2.848	1.163
女きょうだいの有無〔なし〕			
あり	0.804	85.406	2.235***
健在きょうだい数〔1人いる〕			
2人以上いる	0.370	21.436	1.448***
地理的距離〔片道3時間以上〕			
片道1時間未満	0.001	0.000	1.001
片道3時間未満	0.178	3.639	1.195
接触頻度〔年数回以下〕			
月に1～2回以上	0.828	143.850	2.288***
定数	-2.847	400.728	0.058***
モデル $\chi^2$ 値		512.823***	
自由度		17	
n		5554	

(注) 変数名の横の〔 〕内はレファレンス・カテゴリー  
\* $p < 0.05$ , \*\* $p < 0.01$ , \*\*\* $p < 0.001$

オッズ比が有意である変数についてみていくと、性別、年齢層、婚姻状況、女きょうだいの有無、健在のきょうだい数、接触頻度である。特にきょうだいとの接触頻度が「年に数回以下」の人に比べて「月に1～2回以上」の人は約2.3倍、女きょうだいの「いる」人は「いない」人より約2.2倍、情緒的サポート源としてのきょうだいの選択率が高まる。また、「男性」より「女性」、および「有配偶の人」より「結婚したことがない人」は約1.6倍、「有配偶の人」より「離死別者」、および健在のきょうだいが「2人以上いる人」で約1.5倍、「若年層」に比べて「中年層」で約1.3倍きょうだいの選択率が高くなる。

一方、学歴、世帯年収、子どもの数、地理的距離はいずれも有意ではない。しかし、前述の先行研究の検討を通して指摘したように、例えば子どもの存在が情緒的サポート源としてきょうだいを選択するか否かに持つ意味は年齢層や性別によっても異なることが考えられる。そこで、年齢層と性別を組み合わせた「若年男性コーホート」「中年男性コーホート」「高齢男性コーホート」「若年女性コーホート」「中年女性コーホート」「高齢女性コーホート」の6コーホート別の分析を行った。その結果を示したのが、表3のm1である。

情緒的サポート源としてのきょうだいを選択するか否かに影響を及ぼしている要因について、コーホート別に効果の高い要因から順にみてみよう。「若年男性コーホート」では、「接触頻度が高いこと」、「子どもが1人いること」、「健在きょうだいが多いこと」であるのに対し、「中年男性コーホート」と「高齢男性コーホート」ではどちらも「結婚したことがない人」、「配偶者と離死別した人」と配偶者にかかわる要因が影響力の高い上位1, 2番目を占めており、その効果も他の要因に比して卓抜している。しかも高齢コーホートになるほどその影響力は強まっている。

次に、女性についてみると「若年女性コーホート」では、「女きょうだいがいること」が他の要因に比べ大きな効果を持っており、それに「接触頻度が高いこと」、「子どもがいないこと」が続く。「中年女性コーホート」では、「結婚したことがない人」、「女きょうだいがいること」、「接触頻度が高いこと」、「配偶者と離死別した人」である。最後に「高齢女性コーホート」をみると、「結婚したことがないこと」が他の要因に比べて卓抜して影響力が高く、以下「健在きょうだいが多いこと」、「女きょうだいがいること」と続く。

ここで「子どもの数」の要因に注目してさらに分析を進めてみたい。なぜなら、この要因は男女ともに若年コーホートのみにも有意な効果がみられ、中年、高齢コーホートになるとその有意な効果はみられないことから、「子ども」といっても子どもからのサポートがきょうだいからのサポートと代償関係にあるというよりも手のかかる幼少の子どもの存在自体がきょうだいへサポートを求める行為に影響していると考えられるためである。

そこで、m2として「子どもの数」と「接触頻度」との交互作用項を投入したモデルを検討した。その結果を示したのが、同じく表3である。「若年男性コーホート」では子ども数の有意な直接効果が消え、交互作用効果もみられない。逆に「若年女性コーホート」では、子どもが2人以上いる人よりも「1人いる」場合に約2.1倍、「いない」場合に約2.4倍と子どもの数が少なくなるほど有意にきょうだいの選択率が高まる。加えて、「子どもが1

表3 二項ロジスティック回帰分析結果 (年齢層\*性別による6コーホート別)

変数	男性						女性					
	若年		中年		高齢		若年		中年		高齢	
	1956~1971年 28~47歳	1941~1955年 48~62歳	1926~1940年 63~77歳	1956~1971年 28~47歳	1941~1955年 48~62歳	1926~1940年 63~77歳	1956~1971年 28~47歳	1941~1955年 48~62歳	1926~1940年 63~77歳	1956~1971年 28~47歳	1941~1955年 48~62歳	1926~1940年 63~77歳
モデル	m1	m2	m1	m2	m1	m2	m1	m2	m1	m2	m1	m2
学歴 [初等教育]	0.842	0.844	0.900	0.895	0.987	0.981	1.239	1.236	0.873	0.874	1.331	1.355
中等教育	0.857	0.861	0.993	0.997	1.599	1.596	0.882	0.865	0.634	0.638	1.338	1.238
世帯年収 [399万円未満]	1.186	1.187	1.272	1.294	1.531	1.538	0.966	0.983	1.144	1.148	0.808	0.796
400~699万円	1.192	1.194	1.230	1.233	1.905*	1.926*	0.968	1.001	1.354	1.365	0.969	0.921
700~999万円	1.093	1.096	0.914	0.933	1.024	1.033	0.771	0.781	1.420	1.432	0.603	0.577
1000万円以上	1.538	1.514	2.541**	2.536**	2.945**	2.921**	1.028	1.086	1.857**	1.871**	1.414	1.402
配偶者の有無 [配偶者あり]	1.192	1.212	3.311**	3.360**	19.906**	21.654**	0.840	0.851	4.158**	4.234**	9.521**	10.762**
離死別	1.603	1.804	0.797	0.841	0.549	0.489	1.732*	2.351**	1.701	2.139	1.204	0.728
結婚したことがない	1.797*	1.776	0.772	0.968	0.944	1.162	1.094	2.110*	1.022	1.448	1.348	1.762
子どもの数 [2人以上いる]	0.791	0.793	2.000**	2.011**	0.754	0.741	5.166***	5.165***	2.795***	2.769***	1.998*	2.006*
いない	1.725**	1.717**	1.615*	1.616*	2.141*	2.192**	1.241	1.255	1.343	1.347	2.095*	2.214*
1人いる	1.215	1.217	1.066	1.084	1.104	1.111	0.901	0.928	0.802	0.803	1.624*	1.610
女きようだいの有無 [なし]	1.243	1.249	1.125	1.143	0.936	0.948	1.274	1.293	1.008	1.012	1.851*	1.841*
あり	2.132***	2.299**	1.484*	1.636*	2.799**	2.974**	3.535***	4.610***	2.155***	2.412***	1.490*	1.533
健在きようだいの数 [1人いる]	0.083	0.083	0.854	0.854	1.256	1.256	0.623	0.623	0.685	0.685	2.519	2.519
2人以上いる	1.020	1.020	0.371	0.371	0.610	0.610	0.385**	0.385**	0.512	0.512	0.541	0.541
地理的距離 [片道3時間以上]	0.066***	0.063***	0.095***	0.089***	0.103***	0.099***	0.058***	0.047***	0.111***	0.105***	0.055***	0.052***
片道1時間未満	41.500***	41.853***	53.506***	56.157***	59.714***	60.734***	253.409***	260.600***	120.157***	123.100***	54.438***	58.125***
片道3時間未満	14	16	14	16	14	16	14	16	14	16	14	16
片道3時間以上	988	925	687	687	687	687	1255	1050	1050	1050	649	649
接触頻度 [年数回以下]												
月に1~2回以上												
接触頻度×子どもの数												
接触頻度by子どもがいない												
接触頻度by子どもが1人いる												
定数												
モデルχ <sup>2</sup> 値												
自由度	14	16	14	16	14	16	14	16	14	16	14	16
n	988	925	687	687	687	687	1255	1050	1050	1050	649	649

(注) 変数名の横の [ ] 内はレファレンス・カテゴリー、回帰モデル内の数値はオッズ比を示している。

\*p<0.05, \*\*p<0.01, \*\*\*p<0.001

人いること」と接触頻度との交互作用項のオッズ比が0.385で有意な効果を持つことから、「若年女性コーホート」にとって「子どもがいること」はきょうだいとの接触頻度とあいまってきょうだい選択率を減じる作用をもたらしていることがわかる。あわせて他のコーホートではいずれも有意な効果はみられないことも確認された。

最後に、社会経済的要因として投入した「学歴」はどのコーホートにおいても有意な効果は持たず、「世帯収入」も唯一「高齢男性コーホート」において有意な効果がみられただけである。先行研究では大きな影響をもたらすとされてきた「地理的距離」も男性ではいずれのグループにおいても有意な効果はみられず、「高齢女性コーホート」においてのみ一部有意な効果がみられただけであった。

## 5 考察

本稿では、情緒的サポート源としてきょうだいを選択するか否かに配偶者や子どもといった家族がどのような影響をもたらすのかについて、各変数との個別の関連をおさえたうえで変数相互の影響を統制した多変量解析を行い、性別と年齢層を組み合わせた6つのコーホート別に検討を進めた。その結果明らかになった知見のうち、ここでは特に先行研究でも関心の寄せられてきた配偶者、子ども、女きょうだいを中心とした人間関係状況と情緒的サポート源としてのきょうだいの選択・非選択について、ハイラーキー・代償仮説とのかかわりで考察してみたい。

ハイラーキー・代償仮説とは、ある関係がなかったり、関係自体はあってもサポートが得られにくい場合に、それを補うために他の関係が求められるというものであった。分析の結果、総じて情緒的サポート源としてのきょうだいと子どもとの間に代償仮説は認められず、配偶者との間では認められたと言えるが、実態はそれほど単純ではない。まず、子どもの存在である。男女とも若年コーホートほど、「接触頻度」が各回帰モデル内で相対的に大きなきょうだい選択率を高める効果を持つ。そのようななか、「若年女性コーホート」では子どもはきょうだいとの接触頻度を減じ、結果としてきょうだいを情緒的サポート源として選択することを阻害する作用をもたらしていた。ところが、男性や中年、高齢女性コーホートではそのような子どもの作用はみられない。つまり、子どもの存在はサポート源としてきょうだいと代償関係にあるわけではないが、「若年女性コーホート」に対してはいわばライフステージ要因（松本 1995:66）という別の作用を持つということである。

配偶者についても、代償仮説に従えば配偶者というサポート源の消失した離死別者やそもそも配偶者というサポート源を持たない未婚者では情緒的サポート源としてのきょうだいは重要な位置を占めるということであった。しかしながら、若年コーホートでは男女ともに婚姻状況は情緒的サポート源としてのきょうだいの選択について有意な効果は持たないという結果である。



これまで先行研究において、未婚者や離死別者できょうだいの選択率が高まると言われてきた。本稿での結果は、それが若年コーホートには当てはまらず、中年コーホート、高齢コーホートで当てはまるということである。加えて、「離死別者」よりも「未婚者」でより選択率が高まること、また「未婚者」のきょうだい選択率は生涯を通じて一定というわけではなく高齢コーホートになるほど急激に高まること、そして女性「未婚者」よりも男性「未婚者」でその効果が強いこと、というより詳細な知見を得た。男性「未婚者」ではきょうだい選択率が約 20 倍、女性「未婚者」でも約 10 倍になるという分析結果から、本稿のはじめにも指摘したように、生涯未婚率が上昇し、65 歳以上の高齢者でも上昇傾向にある現代社会状況にあって、情緒的サポート源としてのきょうだいの存在は今後一層重要性を増すものと考えられる。

また、「離死別者」でも中年男性コーホートで約 2.5 倍、高齢男性コーホートで約 3 倍と高齢になるほどきょうだい選択率が高まる点は「未婚者」の場合と共通する。だが女性「離死別者」では「中年女性コーホート」で約 2 倍に選択率を高めるものの、「高齢女性コーホート」では有意な効果がみられないという「未婚者」や男性「離死別者」とは違った様相が明らかになった。

これらのコーホート差をもたらす原因の 1 つとして想起されるのが友人や近隣関係といった家族以外の関係状況である。2003（平成 15）年に 60 歳以上の男女を対象に総理府が行った「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」によれば、近所の人々との交流について女性より男性の方が「親しくつきあっている」割合が低い。また、親しい友人の有無についても、「友人のいない」割合が女性に比べて男性で高くなっている（内閣府 2005a）。すなわち、男性の方が女性に比べ高齢になるにつれて家族・親族関係を中心とした人間関係へとシフトしていくのである。「離死別者」よりも「未婚者」できょうだい選択率が高まるのも、「離死別者」では確かに配偶者はいないものの婚姻を通じて形成された家族・親族関係の広がりがあるのに対し、「未婚者」では自らの定位家族しか持たないためだと考えられる。対して、若年コーホートでは家族でも両親が健在であったり、友人や職場の人間関係などを持つために、婚姻状況のきょうだい選択率への有意なインパクトがみられなかったのではなかろうか。

以上から、女性に比べて、また若年コーホートに比べて家族・親族関係を中心とした人間関係へとシフトしやすい高齢男性未婚者は、サポート源としての配偶者が無い（あるいは無くなった）場合にきょうだいを情緒的サポート源として選択する割合が高まるのだと考えられる。

きょうだいについては、女性で若年、中年、高齢のいずれのコーホートにおいても「女きょうだいがいること」が回帰モデルの中でとりわけ大きな影響力を持つことが明らかになった。女性にとって「女きょうだいがいること」がコーホートを問わず情緒的サポート源としてきょうだいの選択率を高める中核的要因であるのは、1 つに女性にとって女きょうだいはきょうだいであると同時に友人的な存在でもあるためだとも考えられる（Jerome

1981). 先行研究でも女同士のきょうだいでは接触頻度をはじめ関係が密であることが指摘されてきた。本稿での分析でもそれを確認する結果であったが、加えて「高齢女性コーホート」では、「女きょうだいがいること」にかわって「健在きょうだい数」の方が効果を持つようになることも明らかになった。これは、男性とも共通する結果である。中年から高齢になると男女ともに性別を問わず「健在な」きょうだいがいることの方がきょうだいの選択率を高める効果を持つのである。

最後に、総じて「女きょうだいがいること」ではなく「健在きょうだい数」が選択率に有意な効果をもつ男性にあって、「中年男性コーホート」では「女きょうだいがいること」が有意な効果を持ち、しかも「健在きょうだい数」よりもモデル内での効果は強い。これがコーホート効果なのか加齢効果なのかについては本稿の分析からだけでは判別がつかない。だが、きょうだい研究で著名な Cicirelli は言う。「ベビーブーム世代が高齢期に到達する将来において、今後きょうだい関係はより重要性を持つようになるかもしれない。それは彼らが多くの子ょうだいを持つからというだけでなく、婚姻関係の持続困難、離婚の増加、子ども数の減少のために、きょうだいの援助を頼りにする必要性が増加するからである」(Cicirelli 1996:68) と。当該コーホートが多産少死で人口規模の大きい団塊世代を含むことを想起する時、この結果は今後注目し、さらなる検討を要するものと言えよう。

## 6 おわりに

本稿は、情緒的サポート源としてのきょうだいに焦点を当て、それを頼りにするか否かに配偶者や子どもといった家族がどのような影響を及ぼすのかを追究してきた。結果、先行研究でも指摘されてきたように「未婚者」「離死別者」でとりわけきょうだい選択率が高いことが明らかになった。しかし、そこにはコーホート差がみられ、原因のひとつとして親や家族外にもつ人間関係状況の違いがあることが考察された。この本稿での知見、考察を土台に今後は友人や近隣関係といった家族以外の人間関係状況も含めて情緒的サポート源としてのきょうだいとのかかわりを追究していく必要がある。

また、高齢男性未婚者できょうだい選択率が急激に高まることが明らかにされ、特に男性で生涯未婚率が急速に高まる現代社会状況にあって注目すべき知見である。きょうだい研究において高齢期のきょうだいとの関係、なかでも男性のきょうだいとのかかわりについては殆ど注目されてこなかった。しかしながら、本稿での知見は今後その重要性が増すことを示唆するものと言える。

とりわけ高齢者にとってきょうだい関係とは高齢期という一時点だけの問題ではなく、そこに至るまでにどのような関係を持ってきたのかが重要な意味を持つ(吉原2003;2004)。なぜなら、「きょうだい達は、現在の直接的かかわりよりも過去の経験や共有された記憶に基づいてしばしば情緒的つながりを確立し、強化」(Gold 1987)していたり、

サポート源としてのきょうだいは、たとえ普段は休止状態にあっても必要な時には「起動させられる (mobilized)」(Connidis 1992;980)という特徴を持つからである。そのため、今後、高齢コーホートにおいて情緒的サポート源としてきょうだいを選択されるか否かを追究しようとする時、過去のきょうだいとの共有経験や高齢期に至るまでの関係状況についても考慮する必要がある。この点についても全国代表サンプルでの検討が可能となるよう、きょうだい研究の蓄積、展開が望まれる。

[注]

- 1) サンプルング、調査実施状況、回収されたデータの特性については(日本家族社会学会全国家族調査委員会 2005)を参照のこと。
- 2) 健在の兄弟姉妹の人数をたずねた項目で、姉か妹のどちらか1人以上いる場合を「女きょうだいが『いる』」、姉も妹もない場合を「女きょうだいが『いない』」とした。
- 3) NFRJ03では、健在のきょうだい一人ひとりについて年上の人から順に3番目のきょうだいについて、「地理的距離」や「接触頻度」などを含め詳細な情報を収集している。1番目から3番目のきょうだいの年齢についての単純集計結果より、1番目のきょうだいは幅広い年齢層にわたっている一方で、3人以上のきょうだいのいる対象者が50歳以上に多いことを反映して2人目のきょうだいは半数強が50~60歳代に集中し、3人目はさらにその集中度が高くなっている。また、「地理的距離」と「接触頻度」にかんして1番目から3番目のきょうだいの回答はほぼ同傾向である(日本家族社会学会全国家族調査委員会 2005)。そこで、若年層から高齢層までを対象とする本稿では、1番目のきょうだいについての情報を用いる。
- 4) 「この1年間に、この方と『話らしい話』をどのぐらいしましたか。電話なども含みます。」の質問に対して、「1. ほぼ毎日(週5~7回)」~「6. まったくなかった」の6件法で回答を求めたものである。
- 5) 「あなたは、次の問題で援助や相談相手がほしいとき、どのような人や機関を頼りにしますか。それぞれの場合について、あてはまるものに○をつけてください。」という質問で、「問題を抱えて、落ち込んだり、混乱したとき」に「自分の兄弟姉妹」を選択しているか否かでとらえている。
- 6) 1番目のきょうだいの「性別」については「女きょうだいの有無」との関連が強い。そのため、きょうだい全体での情報を反映している「女きょうだいの有無」を投入した。また、「女きょうだいの有無」と「健在のきょうだい数」、「地理的距離」と「接触頻度」、「婚姻状況」と「接触頻度」、「女きょうだいの有無」と「接触頻度」の交互作用についても検討したが、有意な影響がみられなかったため、分析ではそれぞれの主効果のみ取り上げている。

[文献]

- 安達正嗣,1999,『高齢期家族の社会学』世界思想社.
- ,2001,「高齢者のきょうだい関係の日米比較にむけて——NSFH 調査(第一次)と NFR 調査のデータ分析を中心に——」日本家族社会学会全国家族調査研究会『認知された家族ときょうだい関係』NFR98 報告書No.2-5,69-82.
- Antonucci,T.C.,& Akiyama,H. 1987,"Social Networks in Adult Life and a Preliminary Examination of the Convoy Model," *Journal of Gerontology*, 42(5):519-23.
- Campbell,L.,& Connidis,L.D.1999,"Sibling Ties in Later Life :A Social Network Analysis,"*Journal of Family Issues*,20(1):114-148.
- Cantor,M.,1979,"Neighbors and friends:An overlooked resource in the informal support system."*Research on Aging*,1,434-463.
- Cicirelli,V.G.,1996 ,"Sibling Relationships in Middle and Old Age"Gene H.Brody (Ed.) *Sibling Relationships: Their Causes and Consequences*,New Jersey: Ablex Publishing Corporation 46-73.
- Connidis,I.A.1992,"Life Transitions and the Adult Sibling Tie : A Qualitative Study",*Journal of Marriage and the Family* 54:972-982.
- Gold,D.T.,1987,"Sibling in old age : Something special.", *Canadian Journal on Aging*, Vol.6,No.3, 199-215.
- Jerrone,D.,1981,"The significance of friendship for women in late life.", *Ageing and Society*,1,175-197.
- Johnson,C.L.,& Catalano,D.J.,1981, "Childless elderly and their family supports",*Gerontologist*,21:610-618.
- 石原邦雄 2001「NFR98 と現代日本家族の分析—中間的成果と今後の課題—」『家族社会学研究』13(1),9-20.
- 松本康編 1995『増殖するネットワーク』勁草書房.
- 内閣府編 2005a 『平成 17 年版 高齢社会白書』.
- 2005b 『平成 17 年版 国民生活白書』.
- 日本家族社会学会全国家族調査委員会 2005 『第 2 回家族についての全国調査 (NFRJ03) 第一次報告書』.
- 渡辺秀樹・稲葉昭英・嶋崎尚子編 2004『現代家族の構造と変容——全国家族調査 [NFRJ98] による計量分析』東京大学出版会.
- White, L.K., & Riedmann,A. 1992," Ties among adult siblings," *Social Forces*, 71(1),85-102.
- 吉原千賀 2003,「高齢期におけるきょうだい関係——活性化とその要因——」『家族社会学研究』15(1), 37-47.
- , 2004,「高齢期におけるきょうだい関係とその規定要因」『ソシオロジ』第 150 号, 109-125.

[謝辞]

中道先生には主任指導教授として、学部生時代から今日に至るまで言葉ではとても言い尽くせないほどのご指導をいただきました。先生のご退職記念号にこのような形で論文を掲載させていただけることを大変光栄に感じております。ここに改めて公私にわたる深いご恩に感謝申し上げますとともに、先生の今後益々のご活躍とご健康を心から祈念いたします。

[付記]

本データの利用にあたっては日本家族社会学会全国家族調査委員会の許可を得た。

(よしはら ちか 生活環境学部助手)

# Siblings as Source of Emotional Support in the Family

YOSHIHARA Chika

## Abstract

As cohabitation with children decreases, remaining single longer and higher divorce rates increase the necessity for support from siblings, making the relation between siblings more important. This paper examines the family influence from partners and the children on their selections of sibling as source of emotional support by using national representative data in Japan: The Japanese National Family Research (NFRJ03).

Logistic regression analysis obtained the following major findings:

- 1) A child doesn't compensate for siblings. However, a child obstructed sibling selection by decreasing contact frequency with siblings of young female cohorts.
- 2) A central factor includes improving the probability that "There are sisters" selects siblings in all cohorts in women.
- 3) The probability that siblings are selected by existing siblings in both male and female aged cohorts is improved.
- 4) The probability of selecting siblings rises for unmarried persons, persons whose partners are dead or divorced more than having a partner, for men more than women, and to the person of an aged cohort more than a young cohort. The probability of selecting siblings rises in men more than women; it is especially high for aged single men.

In the present social situation, aging and unmarried life rates rose rapidly, which argues for the necessity of future research on sibling relationships among the elderly, especially among men.

(Keywords: sibling, the rates of unmarried persons, emotional support, single persons and persons whose partners are dead or divorced)